

# 「うまれる」 × 鎌仲ひとみ

コラボはじめました！

ドキュメンタリー映画を互いに紹介しあうというのは、とても異例な事ではありますが、それは、より多くの方々に映画をご覧いただき、命・家族・絆について、感じ、考えていただければと思ったからです。

鎌仲監督はデビュー作「ヒバクシャ」(2003)で、イラクやアメリカ、そして現在の広島に今も残る放射能汚染について、「六ヶ所村ラブソディー」(2006)では青森県に建設された放射性廃棄物処理工場について、「ミツバチの羽音と地球の回転」(2010)では瀬戸内海の原発建設とスウェーデンでの原子力に頼らないエネルギー政策のあり方についてなど、これまで放射線や原発の恐ろしさを伝える事で、命・家族・絆の大切さを伝えてこられました。

そして最新作「内部被ばくを生き抜く」(2012)では、福島原発事故とそれに伴う放射能汚染という、避けられない不安と現実の中で、どのようにして私たちは生き抜いていかなければならないのか、という点について大きなヒントを掲示しています。

誰にとっても内部被ばくは気になると思いますが、放射能は身体が小さければ小さいほど悪影響があるとされているため、特に僕のような小さい子供のいるパパやママにとっては、切実なテーマであります。

中には眼を反らしたくなるような事実もありますが、我が子、そして家族を守るためにも、本作を見て、感じ、そして行動していただきたいと思います。



豪田トモ

2012年  
春

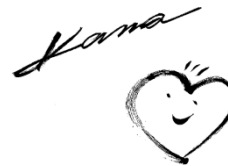
生きる喜びにつなげるために

この12年間で3本の映画を作ってきました。「ヒバクシャー世界の終わりに」、「六ヶ所村ラブソディー」、「ミツバチの羽音と地球の回転」です。どれも核や被ばく問題、エネルギー問題などをテーマにしています。

発端はイラクに取材に行き、劣化ウラン弾で被ばくをしたと思われるがんや白血病になった子どもたちとの出会いでした。子どもたちの命が理不尽に失われていく現場で私は子どもたちをこれ以上被ばくさせたくない、そのためにはどうしたらいいだろうか？子どもたちがその命を生き残るために自分に何ができるだろうか？と悩みました。

目に見えない放射能、それがいかに命にとって脅威になるか、多くの人々に知ってもらえない、というのが私が出した結論でした。そのための映画制作だったのです。

映画「うまれる」は命を生み出す母親たちと生み出された「命」=子どもの物語です。今、世界は「命」にとってリスクに満ち溢れています。子どもを産むという行為がいかに勇気が必要としているか、私はこの映画から教えられました。子どもたちは親を選んでやってくるというファンタジーにも感動しました。そのようにしてこの世界へとやってくる命に私たちはどう向き合ったらいいのか？豪田監督の込めたメッセージと私の映画に込めたメッセージは地下水のように繋がっています。だからこそ、両方の映画を観ていただきたいとお互いの映画を応援しあう関係を結ぶことにしました。「うまれる」は純粋に「生きる」ことへの喜びにつながっている映画です。だからこそ、私の映画と併せて観ていただきたいのです。私の映画もまた、生きることへの喜びにつなげたいと願ってきたから。



鎌仲ひとみ